

平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26K09	氏名	田島 準章
研究主題 —副主題—	通常の学級における特別な配慮を要する児童を包括する支援の在り方 —ユニバーサルデザインの視点を踏まえた算数の授業を通して—		
所属校	千代田区立千代田小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>近年、インクルーシブ教育システムの構築に向けて様々な環境の整備が進められている。平成 26 年 1 月に障害者の権利に関する条約に批准したことにより、その取組は加速されていくこととなる。今や全ての学校にとって特別支援教育の充実が必要とされる時代となった。</p> <p>しかし、その一方で直面している課題は山積している。特に通常の学級において、個々の特性に応じた適切な支援が十分になされていない場合や、その逆に個々の対応に追われることで集団への配慮が不十分になってしまう場合がある。このような状況への対応に難しさを感じている担任も少なくない。特別支援教育の視点に立った指導を行うことが、これらの課題の解決への第一歩であるが、その指導法は十分に浸透しているとは言い難い。</p> <p>このような現状を受け、まずは通常の学級に在籍する特別な配慮を要する児童への適切な支援の方法を明らかにしていく。その一方で、学級担任は学級全体を見なくてはならない立場にあるので、特別な配慮を要する児童だけでなく全ての児童を対象に指導する力が必要である。授業のユニバーサルデザインとは、このような考え方に立ったものである。授業のユニバーサルデザインを行っていくことで、特別な配慮を要する児童を含む学級全体の児童がどれだけ学びやすくなるのか、その有用性を検証することを本研究の目的とする。</p>
II 研究の方法	<p>1 実態の把握と支援策の検討</p> <p>検証授業を行う学級の詳細な実態把握を行うため、学級担任からの聞き取り、授業観察、理解度テスト、意識調査、アセスメントシートを行った。そこから割り出された学級全体の傾向から支援に必要な教材・教具の準備、作成をした。</p> <p>2 検証授業</p> <p>授業のユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習支援を用いた授業を行い、毎時間の振り返りから支援の見直しと改善を行った。</p> <p>3 効果検証</p> <p>検証授業後に再び理解度テスト、意識調査を行った。事前のものと比較することによって学級全体の変容を探った。その中で成果と課題を明らかにし、有効な支援がどのようなものであったかを検証した。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 授業のユニバーサルデザインの視点を取り入れた支援</p> <p>検証授業は小学校第2学年の算数「三角形と四角形」の単元で行った。実態調査から、学級の中には集中力の持続が難しい児童、視覚優位の児童、学習理解が早い児童がそれぞれ一定の割合で存在することが分かった。集中力の持続への課題に対して「参加の促進」、視覚優位に対して「視覚化」、学習理解が早い児童に対して「空白の時間を作らない工夫」につながる手だてを検討し、より多くの児童を包括する支援を取り入れることとした。</p> <p>2 検証結果</p> <p>(1) 意識調査</p> <p>学級の全児童に対して事前に行った意識調査と同様の調査を検証授業後にも行い、肯定意見の割合を比較した。5項目中の3項目に15%以上の伸びが見られた。全ての項目で、肯定的意見をもつ児童の割合が90%以上となり、児童の意欲向上につながる結果となった。</p> <p>(2) 理解度テスト</p> <p>理解度テスト(図形領域に関するもの)も同様に事前と事後に行った。事後テストはほぼ全員の児童が85%以上の正答率となり、この段階までの図形領域の理解が全体的に底上げされた結果となった。</p> <p>(3) 抽出児童の授業参加度</p> <p>抽出児童3名に対して、授業全体の時間に対して、授業に参加している時間を割り出し、百分率で表したものを検証前の授業と検証授業全時間の平均で比較した。A児(集中の持続への配慮が必要な児童)は64%→88%、B児(学習内容を理解することへの配慮が必要な児童)は63%→79%、C児(発展的な学習への配慮が必要な児童)は88%→95%と、全ての抽出児童の授業参加率が上昇した。授業参加促進のための支援が、どのタイプの児童にも効果的であったと言える。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>授業のユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業は、特別な配慮を要する児童を含む学級全体の学習意欲と学習理解の底上げという点において、一定の成果があったと考える。この成果の要因は、学級の実態把握を多角的に行い、その実態に合った支援策を取り入れていったためであると推察される。それぞれの児童にどのようなニーズがあるか見落とさないためにも客観的かつ多面的な実態把握を行っていくことの重要性を再認識させられた。</p> <p>さらに、学級全体の学習理解を高めるためには、一斉指導と個別の学習支援を上手に併用させていく必要がある。授業のユニバーサルデザインはより多くの児童を包括することができるが、それでもその支援が行き届かなかった児童が少なからずいることが考えられる。全ての児童に適切な指導・支援を行っていくための方法を増やしていく必要がある。</p>

